

その小さき手に、一生を捧ぐ。

● 東京都 / 佐藤清志さん

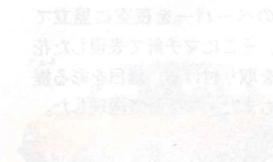
「あ」の日の夜、私は無意識のうちにコンビニでおにぎりを買って、ふと気づくとこの交差点に来ていました。「菜緒は今日、晩ごはんを食べてなかったな。きつと、お腹がすいているだろうな」。そんなことを思いながら……」

東京都品川区の戸越三丁目交差点。車がひっきりなしに行き交う国道1号を背に、佐藤清志さん（53歳）は静かな口調で当時を振り返ります。

2003年5月24日、午前11時18分頃、長女・菜緒ちゃん（当時6歳）は、自転車での交差点を青信号で横断中、右後方から左折してきたダンブカーに巻き込まれました。2歳の弟を自転車に乗せて一緒に横断歩道を渡っていた母の晴江さんは、周囲にいた人たちの悲鳴を聞き、後ろからついて来ていた菜緒ちゃんが被害に遭ったことを知りました。そしてすぐに下の子を交番に預け、横たわる菜緒ちゃんを抱きしめました。ダンブカーは自転車もろとも菜緒ちゃんを押しつぶし、そのまま約100m走行。目撃者の制止により、



事故から1年4か月後に「歩車分離式信号」が導入された現場交差点。その陰には、地域住民らによる熱心な署名活動があったという。



ようやく停止したのです。「警察から連絡を受けた私は、すぐに病院へ駆けつけました。菜緒の身体は大きなダブルタイヤに踏みつぶされ、かわい顔を見ることはできませんでした。でも、唯一原形を留めていた小さな手を握った瞬間、いつも手をつないで散歩した、あの菜緒の手だとすぐにわかりました」

菜 緒ちゃんにとって2人目の弟が生まれたのは、それから2週間後のことでした。「ママは生まれてくる赤ちゃんの面倒を見てね。わたしはひゅうくん（すぐ下の弟）の面倒を見るからね」

そう言っていたしっかり者の菜緒ちゃん。かわいい弟の誕生、そして翌年には小学校に入学して、大きなプールに入ることをあれほど心待ちにしていたのに、そんなあたりまえの夢さえかなわなかったのです。

「なぜ、青信号を守っていた子どもが命を奪われるのか。いったい、大人は何をしているんだ……」

あの日、湧きあがった、怒りに満ちたその問いは、同時に自責の念で



弟の面倒をよく見るやさしいお姉ちゃんだった菜緒ちゃん。

もあつたと言う佐藤さん。今も毎週のように中学校や高校へ足を運び、講演活動を続けています。

「実は菜緒の同級生も、小学校に入つて間もなく交通事故で亡くなりました。車は時として凶器に変わります。ドライバーの意識を変えることが、交通弱者の未来を守ることにつながることを、これからハンドルを握るであろう生徒たちに伝えたい。もう、後悔はしたくありません」

あの朝、2階のベランダから見送ってくれた菜緒ちゃん。最後に見たその姿を、佐藤さんは今もはっきりと覚えています。

「生きているということは、それだけで奇跡ですね。菜緒は突然目の前から消えてしまいましたが、私が生き続け、語ることで、その存在は生き続ける。そう信じています」